

Title	飛鳥佛教と涅槃經
Sub Title	
Author	志水, 正司(Shimizu, Masaji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1976
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.47, No.4 (1976. 7) ,p.23(289)- 23(289)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究余滴
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19760700-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

飛鳥仏教と涅槃經

従来、飛鳥仏教と大乗の涅槃經との関係についての見解は、消極的、ときに否定的ですらあった。涅槃經の正史初見が続日本紀養老六年十一月丙戌条とくだり、飛鳥仏教では法華・勝鬘・維摩の三經義疏の印象が優先されすぎたためでもあるうか。

しかしながら、両者の関係密接を考えさせる資料は少なからず指摘しうる。

(イ) 天寿国繡帳銘に、聖德太子が妻橘郎女に告げられた法語としてみえる「世間虛偽、唯仏是真」は、やはり涅槃經の「一切諸法皆是虛偽」(橋陳如品)・「如來者即是真實、真實者即是仏性」(聖行品)などによつたものであろう。

(ロ) 舒明即位前紀に、聖德太子が臨終に諸子らへ遺言し、山背大兄王が永戒としていたという「諸惡莫作、諸善奉行」の七仏通戒偈は、涅槃經梵行品にもみえてゐる。

(ハ) 上宮聖德法王帝説に、聖德太子が能悟されたとみえる「涅槃常住、五種仏性之理」については、疑問異説も出されてゐるが、古田紹欽氏のいわれるように、率直に太子が涅槃經の仏性常住の教理にも通ぜられたと解されるのであり、五種仏性は乳・酪・生酥・熟酥・醍醐の五味説を指し、涅槃經に説かれた最上究極の真理を示したものであろう(「涅槃常住五種仏性の問題について」仏教と文化—鈴木大拙博士頌寿記念論文集一所収)。

(二) また、玉虫厨子の須弥座左側面に描かれた「施身聞偈図」は、涅槃經聖行品に由来するものである。

この涅槃經の伝来は、高句麗・百濟の僧侶によつたものであろうが、中國南朝の仏教界の深い影響が思われる。